



2019年4月4日 第51号

JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第62回日本手外科学会 学術集会の開催にあたって

岩崎 倫政

(北海道大学大学院医学研究院
機能再生医学分野整形外科学教室)

目次

- 第62回日本手外科学会学術集会の開催にあたって
- 手外科温故知新V:
- 手外科パトニリー(第4回)
- Joyの声(第1回)
- 委員会報告
- JSSH-ASSH Traveling fellow 報告記
- JSSH-ASSH Traveling fellow 報告記
- 日本手外科学会関連のお知らせ
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記

この度、第62回日本手外科学会学術集会を2019年4月18日(木)、19日(金)に、札幌コンベンションセンターにて開催させていただきます。北海道 札幌での開催は、北大整形外科同門である石井清一先生(当時札幌医大整形外科教授)が1993年に第36回の本学術集会を開催して以来、2回目となります。また、北大整形外科出身の会長としては、2007年の第50回学術集会の会長を務められた荻野利彦先生(当時山形大整形外科教授)以来、私で3人目となります。

学会のメインテーマは、北大の建学精神にちなみ“*Be Ambitious, Be Innovative*”としました。また、サブテーマとして“運動器外科学としての手外科”、“手外科領域におけるニューフロンティア”、“若き手外科医の飛躍”を掲げました。これらのテーマに沿ったトピックスを中心に7つのシンポジウム、5つのパネルディスカッションを組みました。さらに、理事長講演(加藤博之理事長)、2つの特別講演(三浪明男先生、池川志郎先生)、6つの招待講演(Edmund Y.S. Chao先生、Scott W. Wolfe先生、Scott P. Steinmann先生、Jeffrey Yao先生、Christphe Oberlin先生、村上正晃先生)を組み込んでいます。

独自の企画として若手医師を対象としたベストペーパーアワード(臨床と基礎、各6演題)と指導者層を対象としたベストスーパーバイザーアワード(5名)を設けました。前者は、first authorが35歳以下である演題(臨床と基礎別)の中で査読点数の上位のものを選びました。後者は、大学所属、大学所属以外に分けて、corresponding authorとして演題登録数の多い先生方を選びました。また、より優れた演題をピックアップしフォーカスを当てる目的で、一部のシンポジウムには一般

応募演題の中から査読点数の高いものを組み込みました。

近年、ライフサイエンスの領域で、本邦の国際的プレゼンスの低下が叫ばれています。サイエンスの発展なしに、革新的医療は生まれてきません。過去、我が国は本学会が中心となり、手外科領域の臨床および研究面で世界を牽引してきました。今後、日本の手外科がさらなる国際的リーダーシップをとるには、若い世代の活躍が必須です。本学術集会在、これを改めて啓蒙する場になればと強く願っております。

北大整形外科教室が本学術集會を開催するのは、今回が初となります。フロンティア精神あふれる北海道 札幌の地で、第62回日本手外科学会学術集會を開催できることを教室員ならびに同門会員一同、たいへん光榮に存じます。多くの先生方のご参加を心からお待ち申し上げます。



第62回
日本手外科学会学術集會
The 62nd Annual Meeting of the Japanese Society for Surgery of the Hand

**Be Ambitious,
Be Innovative!**

2019年
4月18日(木)・19日(金)

会場 札幌コンベンションセンター
〒003-0006 札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1

会長 岩崎 倫政
北海道大学大学院医学研究院 機能再生医学分野 整形外科教室

事務局 北海道大学大学院医学研究院 機能再生医学分野 整形外科教室
〒060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

運営事務局 株式会社 コングレ 北海道支社
〒060-0005 札幌市中央区北5条西5丁目112-112 在友生命札幌ビル7階
TEL : 011-233-0005 FAX : 011-233-0035
E-mail : jssh2019@congre.co.jp

<http://www.congre.co.jp/jssh2019>

手外科温故知新V:

Mr. Barnard M. O'Brienと最初のvascularized fibula grafting 手術記録(藤川カルテ)

上羽 康夫

京大医短部名誉教授、日手会名誉会員、医療法人白菊会理事長

ニューヨーク・コロンビア大学Robert E. Carroll教授の下で手外科修練を始めた私が初めて米国手外科学会に出席し、サンフランシスコの開業医Dr. Jack Tupperに誘われてDr. Minor Nichols (アメリカ人)、Mr. Bernard M. O'Brien (オーストラリア人)、私(日本人)の4人が連れだってサンフランシスコ見物に出かけ、fisherman's wharfで食事を楽しんだ。Mr. O'Brienとは初対面であり、彼についての知識はまったく無かったし、オーストラリアの医学知識も乏しかった。内科医はDoctorであるが、外科医はMisterと呼ばれることすら知らなかった。だが、訛りの強い英語で活発に話すMr. O'Brienには強い印象を受けた。

Mr. Bernard M. O'Brien (1924~1993) はメルボルン生まれの有能な学生で粘り強い運動選手として知られていた。1943年彼はメルボルン大学に籍を置いて科学と医学の研究を始め、メルボルンの聖ヴィンセント病院やロイヤル・メルボルン病院で働きながら勉学に励み、1954年に臨床外科と組織病理学を習得し、翌1955年手術マスター学位を取得した。そして、1956~1957年英国オクスフォード大学で整形外科を研修し、その後米国ニューヨークのルーズベルト病院で6ヶ月間形成外科を勉強した。海外留学を終えて豪州へ帰国した彼だったが、望む職が見つからず数年間眼科教授の下で顕微鏡を用いて神経組織に関する研究に従事していたが、1968年彼は奨学金を得て、小血管や神経縫合を研究するマイクロサージャリ研究所を立ち上げた^{文献1, 2)}。後年にはマイクロサージャリの開拓者として有名になったが、1965年の初対面当時には未だ有名ではなかった(写真1)。



写真1: Bernard McCarthy O'Brien (1924・12・25~1993・8・14)

私が米国で手外科研修を終えて帰国した6年後の1971年に玉井進先生((奈良医大)が切断指再接着に成功し、手外科分野におけるマイクロサージャリに注目が集まった。この頃には京大手外科グループも安定し、紹介患者の数も増えていた。

1973年秋に森英吾先生(当時、京都市立病院整形外科部長)からの紹介状を持った20歳男性が来院した。転倒によって右尺骨々幹部骨折を被ったが、長期保存療法では癒合せず、髓内固定術・骨移植術など3回の手術を行っても骨癒合が得られない症例であった。市内随一との名声高い整形外科医からの依頼であったから従来の治療法では治せない症例だと直ちに悟った。色々な検索結果と文献渉猟により此のneurofibromatosis症例には血管柄付き遊離腓骨移植術(free vascularized

fibula graft) 以外の治療法はないと結論した。奈良医大で微小血管縫合術を学んだ藤川重尚先生が主治医となり、1973年12月18日マイクロサージャリの経験がある4人の整形外科医が約10時間かけて無事手術を終えた。最重要である血管縫合は藤川君が担当し、手術記事も主治医であった彼が英語で丹念な手術記事6枚、付図4枚をカルテに書いた(下記の手術記事1~6、および次ページの付図1~4)。術後経過は順調であった。術後約1週間経った頃、Mr. Taylorと名乗るオーストラリアの形成外科医が来院した。Mr. O'Brienの下で仕事をしていると云う彼は病棟回診をしながら熱心に各症例の説明を聞いていたが、特にvascularized fibula graft症例には強い関心を示し、回診後に藤川先生が書いた英語の手術記事と挿絵を熱心に読み、カメラに収めていた。その後、彼からは何の連絡もなく、再会した事もない。

藤川先生は約半年後の1974年7月に藤巻有久先生(順大)と同じ飛行機でオーストラリアに向かい、メルボルンのMr. O'Brienの下で6ヶ月間微小血管縫合を用いた動物実験を行い、6ヶ月後に無事帰国した。当時、O'Brienの研究所にはイギリス、イタリア、アメリカなどの研究者に交じって日本の豊島先生(大阪市大)、久保先生(広大)が居られ、其の後も日本から多くの先生方がMr. O'Brienの下で勉強された。

Operative Note (Case 10)
 procedure: the vascularized fibula grafting for an aneurysm of the right ulnar.
 Surgeon: Dr. Ueda
 Assistant: Fujikawa, Dr. Saito, Dr. Wakabe
 presentation, at 9: am
 History of disease: from 11:30 am to 2:30 p.m.
 Estimated blood loss: 200 cc
 Anest. time: 1:00 am
 Operation:
 Under satisfactory general anesthesia, pt. was placed on his right side with the right arm on an arm board.
 The right arm and the left leg were prepped and draped as usual manner.
 The pneumatic tourniquet applied on

手術記事 1

the right arm and the left thigh were inflated up to rooming and 20 mmHg respectively during the procedure.
 First, a vascularized fibula graft was obtained from the left fibula as follows. A longitudinal skin incision about 20 cm in length was made on the lateral aspect of the left lower leg. Dissection was deepened between the anterior and the fibular leg muscles, reflecting the peroneal muscles anteriorly.
 The middle third of the fibula was exposed sub-peritoneally on its anterior and lateral aspect. On the posterior aspect of the fibula, the peroneum on

手術記事 2

the muscle attachment were preserved so that the posterior artery of the fibula was carefully protected; the muscles such as the fib. bell. leg. and fibular part were detached extra-peritoneally.
 The peroneal vessels were identified distally and proximally along the posteromedial border of the fibula and the muscle branches of these vessels were cut off and ligated.
 The middle third of the fibula with the peroneal vessels about 15 cm in length was resected at the proximal and the distal end of the graft with a straight razor. The graft was about 15 cm in length and its proximal and the distal ends were cut sharp with a

手術記事 3

This graft was kept in normal saline solution until use.
 On the lateral aspect of the right forearm a longitudinal skin incision was placed along the old operative scars running the vein trunk. Dissection was deepened through the subcutaneous tissue, which was reflected with carefully dissection to expose the ulnar artery. The peroneum on the graft was divided well above and below the anastomosis of the ulnar.
 A metal plate and wire screws which had been inserted at the last operation were removed.
 Almost if there were time to find it further as internal fixation of the bone. All new tissue were excised from the non-union and the

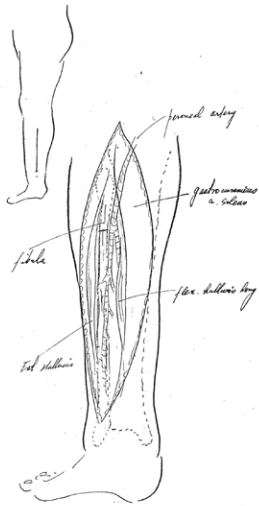
手術記事 4

of the fragments were freed and mobilized. The distal fragment was shorter and softer than the bone in normal condition.
 The vascular bone was resected from the ends of the fragment proximally and distally and then both ends were fashioned with a dog ear method.
 The defect of the ulna was measured to be in length.
 The fibula fragment was inserted so that the proximal end of the graft and the distal fragment of the ulna were in apposition. The fragment was attached to the ulna with two 5-0 cotton sutures proximally and one near distally.
 The peroneal artery and vein which attached to the graft were anastomosed to the ulnar artery - or vein, near it

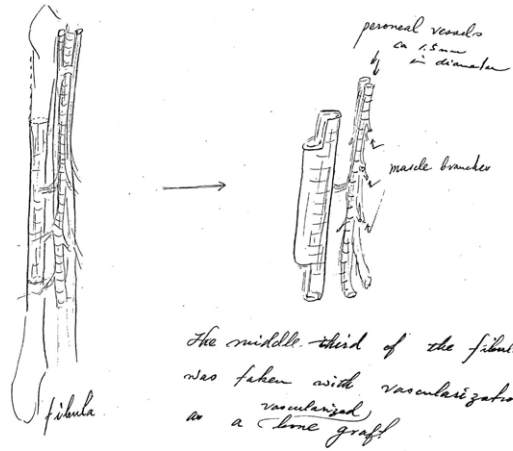
手術記事 5

the wrist and to the dorsal ulnar vein on the dorsal aspect respectively.
 The ulnar vein was too small to be anastomosed, so that the dorsal ulnar vein in the wrist was used.
 After anastomosing of the peroneal vessels, distal flow was observed in the artery, through the anastomosis site, but poor in the vein.
 After control of bleeding, the wound was closed with 5-0 cotton sutures by layer.
 The right arm was immobilized in a plaster slab with the elbow in 90° flexion and the wrist in slight extension. The elastic bandage was applied on the left leg.

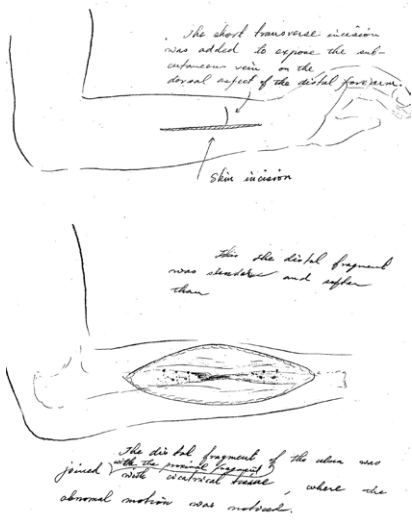
手術記事 6



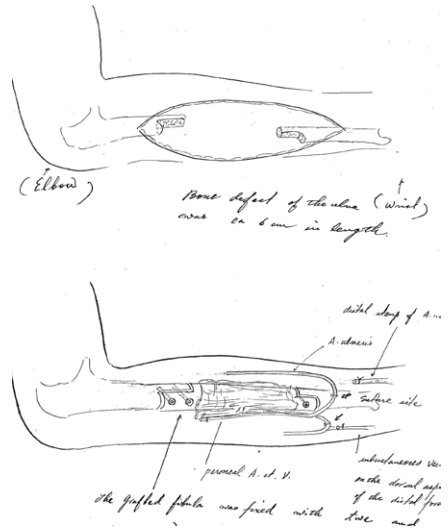
付図 1



付図 2



付図 3



付図 4

1975年Mr. Taylorはfree vascularized fibula graft の論文を発表した^{文献3)}。その論文にはvascularized fibula graftを3例に行い、良結果を得たと報告した。しかし、日本での体験については何も触れられておらず、又その論文著者の中にMr. O'Brienの名前が無かったのは意外であった。噂によると、彼はその論文を書いてから間もなくカナダの有名大学に移ったそうだ。1977年に出版されたBarnard O'Brien著“Microvascular Reconstructive Surgery”の中でvascularized fibula graftの章に「この術式はTaylor以前に(Ueba)が行っていたかも知れぬ」と記載している^{文献4)}。彼はMr. Taylorか藤川先生から或る程度の情報を得ていたに違いない。

1978年8月にサンフランシスコで第2回世界マイクロサージャリィ学会(World Microsurgery Congress II)が会長Dr. Bealeのもとで開催されたので京大手外科グループの梁瀬義章先生、清水克時先生らと共にそれに参加した(写真2)。私は8月30日に“Bone union and vascularization”の



World Microsurgery Congress II会場（1978.8.30日）にて。左より梁瀬義章、Beale会長、上羽、清水克時、（氏名不明）

口演を行い、その中で我々の行ったfree vascularized fibula graft術式について話した。其処には若いアメリカ手外科医が多数臨席し、私の話を熱心に聞いてくれた。

私達の行った遊離血管柄付き腓骨移植術が我国で開発されたことは光嶋勲教授（東大・形成外科）や玉井進教授（奈良医大・整形外科）のご支援により国内では比較的早く認められたものの、外国ではなかなか認められなかった。その主な理由は私自身がこの手術についての論文を書かなかったからである。実は、手術後の移植腓骨は予測したように生着したのだが、腓骨遠位接合部の骨癒合が遅延していたので論文発表は控えていたのである。ようやく1982年に論文が出来上がり、整形・災害外科誌に“…9年間のfollow-up”の題名をつけて投稿したが、出版は翌年の1983年に持ち越された^{文献5)}。従って、読者は1974年にこの手術が施行されたと考えたのであろう。外国では日本語論文はなかなか読まれない上に手術時期がMr. Taylorの初回手術年と同年であったので、当然注目に値しない論文であった。だが、幸いなことにWorld Microsurgery Congress IIに出席していたMayo ClinicのDr. Michael Woodが1990年に出版した“Atlas of Reconstructive Microsurgery”^{文献6)}によってアメリカ国内で詳細が知られるようになり、他国でも次第に認められるようになった。現在ではfree vascularized fibula graftは世界中の整形外科、形成外科、手外科、口腔外科などの広い領域で頻繁に使われている。

この手術法により私は多くのことを学んだ。①新しい術式を開発するには、その動機と情熱を必要とし、それに対応できる知識と技術を常に持たねばならない。そして、その成功は真に大きな喜びである。血管柄付き腓骨移植術が神経線維腫症骨折の治療に新たな希望を与え、現在では世界中で行われているのは絶大な喜びであり、誇りでもある。②この術式が早く世界に広まったのは、vascularized fibula graftの論文を国際的医学誌に初めて掲載したMr. Taylorのお陰であり、彼

がこの手術適応を更に広げたのである。その意味では、彼に深く感謝している。だが、指導を受けたMr. O'Brienを無視した行動には何か違和感を覚える。また、日本での経験に敬意を払うならば、更なる交流を深めることが出来たであろう。③この術式が世界に広まったのは藤川先生が英語で手術記事を書いたからである。この手術がオーストラリア人によって世界に普及されたのは、矢張り意外であった。英語が国際語であると実感した。現代医学分野では学会発表も論文発表も出来るだけ早い機会に英語で行うのが賢明であろう。④現在の手術記事はパソコンで書かれるが、矢張り手書きには美しさと品格が備わっている。これは単なるノスタルジアなのだろうか。

参考文献

1. Westmore A: O'Brien, Bernard McCarthy (Bernie) (1924-1993), Australian Dictionary of Biography, <http://adb.anu.edu.au/biography/obrien-bernard-mccarthy-bernie-18052>.
2. Surajit B: Indian Journal of Plastic Surgery 47 : 282-283, 2014.
3. Taylor GI et al : The free vascularized bone graft - A clinical extension of microvascular techniques. Plast Reconst Surg 55 : 533-544, 1975.
4. Bernard M. O'Brien: Microvascular Reconstructive Surgery. Churchill Livingstone, New York: 278-284, 1977.
5. 上羽康夫、藤川重尚：神経線維腫症における遊離血管柄付腓骨移植の9年間のfollow-up—症例の報告と文献的考察—。整形・災害外科26：596-599、昭和58年(1983)。
6. Wood MB: Atlas of Reconstructive Microsurgery. Aspen Publishers Inc. Rockville, Maryland, 1990.

手外科バトンリレー (第4回)

私の Great Mentor - Robert E. Carroll 先生を偲んで

石井 清一

札幌医科大学名誉教授、日手会名誉会員

私の手の外科の恩師、Robert E. Carroll先生は2009年8月16日に亡くなられた。92歳の生涯であった。私がコロンビア大学の付属病院・New York Orthopedic Hospitalで先生から手の外科を学んだのは1968～69年の1年間である。京都大学整形外科の上羽康夫先生がCarroll先生の手の外科のresidentを終えて帰国され、日本で活躍を開始して間もない時期であった。大学卒業年次が私の一年先輩という気安さもあって、色々と相談にのっていただいた。私がCarroll先生から手の外科を学ぶことが出来たのは、上羽先生の親切な御指導によるところが大きいと感謝している。1969年は、米国では人類初めての月面着陸の成功に沸き返っており、Carroll先生は58歳、手の外科医としても脂が乗りきっていた。

1) Carroll先生とNew York Orthopedic Hospital

New York Orthopedic Hospitalの診療グループは、Carroll先生直属のresidentが1名と、病院所属のjunior resident 2～3名から構成され、日常の手の外科の診療に従事していた。Carroll先生の手のグループには、その外にfellowと呼ばれるグループが存在するのが大きな特色であった。私の身分はfellowであったが、2名の米国出身の整形外科医と、サウスアフリカ、メキシコ、オーストラリア出身の医師が加わり国際色が豊かであった。

fellow達は毎朝7時半には手術場に集合する。8時から始まるCarroll先生の手術を手術台の周りで見学する。質疑応答は自由である。手術は午後2時には終了する。fellow仲間で昼食を取ってから、病室で翌日の手術症例の診察を済ませると、病院内の主なスケジュールは終了する。しかし、New Yorkは大都市である。手の外科に関する検討会やレクチャーは必ずどこかの医療施設で行われており、一週間のスケジュールが院内に張り出されている。出席は自由なので、fellow達は興味のあるカンファランスを選択して手の外科の知識を吸収していた。

このような生活を1年間続けた後、私は北大に戻って手の外科外来を開設した。1993年には、日本手の外科学会を主宰するという光栄に浴した。Carroll先生には、学会に出席いただき「Hand Surgery - Present and Future」の特別講演をいただくことが出来た。本学術集会において、Carroll先生が日手会の名誉会員に推薦されたことは、私にとっても大変な喜びであった。

Carroll先生のfellowを通じての手の外科医の育成の情熱は、その後も衰えることはなかった。私財を投げ打っての手の外科医育成の偉業は、生涯を通して続けられた。わが国においては、その数は明らかにされていないが、日本からのfellowとして育てていただいた手の外科医は、かなりの数に上るものと思われる。1年に1～2名としても80名は下らないのではないだろうか。

2) Carroll先生と京都大学手の外科グループ

Carroll先生が最も信頼し、生涯を通じて親交を続けたのは、上羽先生を中心とする京都大学の手の外科グループであった。Carroll先生の御逝去にあたっては、当時、New Yorkに在住しておられた藤尾圭司先生が京都大学手の外科グループを代表してCarroll Memorial Serviceに出席され、その時の様子を私にまで知らせて下さった。また、2016年4月23日、Carroll先生のかつてのresident、William H. Seitz Jr.先生が来日されたのを機会に、近畿大学整形外科の柿木良介教授がRobert Carroll Memorial MeetingをWestin Miyako Hotel Kyotoを企画された。Meetingへの出席のお誘いをいただいたことを、大変光栄なことと思っている。私にとってもGreat MentorであるRobert E. Carroll先生を今一度偲んで、ここに追悼の文章を書かせていただいた。

3) Carroll Memorial Service (Figs 1 & 2)

京都大学手の外科グループを代表して藤尾圭司先生がMemorial Serviceに出席されました。藤尾先生からいただいたメールには、次のような文章が添付されていました。

この金曜日(2009年10月2日)にCarroll Memorial Serviceに出席してきました。式の中でRosenwasser氏は、Carroll先生のクリニックには今年もドイツ、トルコ、日本からのinternational fellowが訪れたことを紹介しておりました。Memorial Serviceは厳粛な雰囲気の中で執り行われました。とても写真を撮れる雰囲気ではなかったので教会の外観とThanksgivingの式次第のみを同封いたします。



Fig 1



IN THANKSGIVING
FOR
THE LIFE OF
ROBERT ERNST CARROLL
November 7, 1916 – August 16, 2009
October 2, 2009
11:00 a.m.
St. James' Church
865 Madison Avenue
New York, New York 10021

IN THANKSGIVING		
ROBERT ERNST CARROLL		
PRELUDE	Adagio from Sonata I Bis du bei mir Arioso Finale from Sonata VI	F. Mendelssohn J.S. Bach J.S. Bach F. Mendelssohn
REFLECTIONS		Brewster Carroll Melvin Rosenwasser
OPENING SENTENCES	<i>All stand</i>	Prayer Book, p. 469
COLLECT FOR THE BURIAL OFFICE		Prayer Book, p. 470
HYMN 555		<i>Lancashire</i>
PSALM 121		Jonathan Clay
PSALM 23	<i>In unison</i>	Prayer Book, p. 476
READING	Johan 14:1-6	Judith Carroll
HOMILY	The Rev. Craig D. Townsend	
HYMN 362		<i>Nicaea</i>
THE APOSTLES' CREED	<i>All stand</i>	Prayer Book, p. 66
THE LORD'S PRAYER		Prayer Book, p. 67
THE PRAYERS		Prayer Book, pp. 480-481
THE COMMENDATION		Prayer Book, p. 482
THE BLESSING		
HYMN 680		<i>St. Anne</i>
POSTLUDE	Prelude in C Major	J.S. Bach

Please remain in your pews until the family has been escorted from the church.

*Immediately following the service,
please join the Carroll family at a reception at
The Colony Club
364 Park Avenue at 62nd Street*

CLERGY
The Rev. Craig D. Townsend
Vicar

VERGER
Jean-Claude Pelissier

ORGANIST
Dr. E. Davis Wortman
Director of Music and Organist

USHERS
Brewster Carroll
Jonathan Clay
Howard Schapiro
David Schapiro
Michael Schapiro

Fig 2

4) Robert Carroll Memorial Meeting *in Kyoto* (Figs 3 & 4)

京都大学手の外科グループを代表してMeetingを主宰された柿木良介教授からは、次のようなメールをいただきました。

われわれが4月24日午後3時から企画したRobert Carroll Memorial Meetingに参加の御返事をいただき、厚く御礼申し上げます。Meeting終了後は午後7時から夕食会を用意しております。是非参加していただければ幸いです。

Meeting終了後、柿木教授からいただいたメール：

We really owe it to you that we had the successful meeting. We also have to thank our great mentor, Prof. Robert E. Carroll for giving us an opportunity to meet each other and unite us as his followers. We swear that we will continue to raise up the seeds he gave us to bloom beautiful flowers.

Seitz先生はMeetingでは“Robert E. Carroll M.D. : The Man & The Legend”と題してスピーチをされました。かつての教え子達に囲まれて本当に楽しそうにされている晩年のCarroll先生のお姿が印象的でした。

後日、Seitz先生からいただいた柿木教授宛のメール：

I feel confident Bob is very happy & proud of the accomplishment & collegiality of his “offspring”
…!!! Cheers…!!!

Robert Carroll Memorial Meeting

Date: April 23rd (Sat), 2016

Time: 15:00-19:40

Place: Westin Miyako Hotel Kyoto

Moderators: Ryosuke Kakinoki (Professor, Kindai University)

Ryosuke Ikeguchi (Associate Professor, Kyoto University)

Opening Address: Yasuo Ueba (Professor emeritus, Kyoto University)

Presentation 15:05 – 19:30

1. William Seitz (Professor, Cleveland Clinic)

"Robert E. Carroll, M.D. : The Man & The Legend"

2. Seiichi Ishii (Professor emeritus, Sapporo Medical Collage)

A memory of Prof. Robert Carroll - His favorite operation, "Cup and cone type arthrodesis"

3. Kevin Chung (Professor, Michigan University)

Revisiting Dr Carroll's concept for finger transposition for the thumb and closing finger clefts after trauma

Coffee break

4. Moroe Beppu (Professor emeritus, St. Marianna University)

Our Strategy for Recalcitrant Lateral Epicondylitis

5. Scott Duncan (Professor, Boston University)

Strategies for dealing with turbulent healthcare markets

6. Jeffery Yao (Associate Professor, Stanford University)

Scaphoid nonunion: state of the art for 2016

7. Yasuo Ueba (Professor emeritus, Kyoto University)

Tendon ball replacement for treatment of Kienbock's disease

Fig 3

5) おわりに

生涯を通して世界の若い手の外科医の育成に情熱を燃やし続けたRobert E. Carroll先生の偉業を偲び、謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。



Fig 4 Memorial Meetingの主だった出席者（別府諸兄名誉教授は遅れて参加）

Joy の声 (第 1 回)

堀井 恵美子

関西医科大学 整形外科

日手会ニュースにJoy (女医) の声の欄ができました。全国の女性会員にバトンを渡しなが、色々な声を日手会会員に届け、魅力ある学会の発展につなげていきたいという思いからできました。

女性医師割合が上昇しているにもかかわらず、日整会の女性会員数は依然として4%程度と横ばいです。手外科学会では、その比率は約11%と比較的高いものの、女性代議員比率は4%であり、また学術集会で女性会員の発表は増えてきているものの、座長・シンポジストとしての活躍は低調です。

“外科系の仕事は女性に向いてないのでしょうか。”好き・嫌い“の前に、将来にわたってキャリア形成ができるかどうか、で躊躇してしまうのではないのでしょうか。女性医師にとって一番の問題は、長時間労働と、出産・育児で、一時現場を離れると復帰が困難なことにあります。特に外科系は、一旦手術室から離れると、次第に執刀医から退き、motivationが低下してしまいがちです。

女性医師の現場復帰への支援に関しては、外科系だけの問題でなく、全科共通の問題でもあり、日本医師会は、女性医師支援センターを設立し、毎年“大学医学部・医学会女性医師支援担当者連絡会”を行っています。日手会も遅ればせながら、2017年に女性医師支援ワーキンググループが設立され、アンケート調査で、女性会員の声を聴いてみました。その結果、キャリア形成時期に育児の時期が重なると、研修・研究の継続、学術集会への参加が困難、専門医を取得しにくい、また取得しても継続が困難である、などなど明らかとなりました。女性代議員の増加・travelling fellowへの参加などに関しては、興味はあっても現状に手一杯でそれどころではない様子がかえりました。

出産はともかく、育児は、男性も含め社会全体が担うことができるはずですが、なぜか依然として”母“に多くの責任が課せられています。日本昔話の、男性は外・女性は家という古来からの概念は依然として存在し、そのような環境で育つと、各個人の適正よりも、男性か女性かによって、役割分担を求められるようです。そのような考え方が変わらないと、日本での女性の社会進出はまだ遠いと思います。30代の子育て真最中の女性医師が、如何に時間をやりくりしているかを聞いて、驚嘆することがあります。そして、このパワーを仕事にも生かせるような状況を作っていくことができないかと考えます。

現在の医療の現場では、100%以上の就業を要求され、特に整形外科では、緊急の対応も含め、非人間的な業務を要求されることもあります。柔軟な勤務体制で、チームとして患者に対応できるようにしたりし、休職中の医師向けに実践教育システムがあれば、復帰に伴う不安も軽減し、育児

中の女性医師も現場へ復帰しやすいと思います。これは女性に限らず、一時離職した人、フルタイムの労働が困難な人にとっても必要なシステムです。医療機関あるいは、上司が、このような状況を理解して、少し配慮していただければ、もっと女性医師も活躍でき、それはすなわち、同僚医師（職場）にとってもプラスに働くのではないのでしょうか。

私自身は幸か不幸か育児に携わることなく、仕事中心の生活をして今に至っています。若い時は先輩の背中をみて歩けばよかったのに、中堅となり、若手を指導し、また組織全体を考える立場に立たされた時、違和感を感じるようになりました。私自身の個人的資質の問題もあるとは思いますが、男性中心の社会の中で、“なぜ？”が一杯生まれ、一方では、指導者としての教育を受けてこなかったことを痛感しました。どんな組織も成長するためには多様な視点が重要であり、日手会もまさに、女性会員の活躍が必要な時期にあると思います。そのためには、女性会員自身の意識改革も必要です。このJoyの声は、多様な働き方をしている女医の声を通じて、若い世代にとっては、なんらかのアドバイスを、また、若手を指導する立場におられる先生方には、“多様性”をご理解いただけるように情報を届けたいと思っています。近未来には、女性会員も組織の中核で働いているような日手会となっていることを夢見ています。

定年に向けてスローライフを楽しむべくいろいろ準備をしてきましたが、突如、関西医大より招聘をうけ、昨年9月から関西で生活を始めました。齋藤教授のご厚意に、正直とまどい、また、新しい環境で‘Zero’からの船出は非常に厳しいことは承知の上で、小舟に乗って大海に漕ぎ出しています。躊躇する私の背中を押してくれたのは、数名の女性会員の皆さんでした。

若い世代とのgeneration gapは大きく、何をいまさらと一笑に付されるかも——と思いながら、原稿を書きました。熱い想いを次の会員にバトンリレーします。

委員会報告

財務委員会

委員長 山本真一

平成30年度財務委員会のメンバーは多くが交代し、担当理事に平田仁先生(名古屋大学)、委員に金潤壽先生(太田総合病院)、富田一誠先生(昭和大学江東豊洲病院)、中道健一先生(虎の門病院)、原章先生(順天堂浦安病院)、別所祐貴先生(永寿総合病院)と委員長に山本真一(横浜労災病院)で構成されています。外部アドバイザーである長尾謙太税理士と事務局の中尾和宏氏とともに、毎年の学会収支決算と予算案や長期的な財政計画などについて審議しています。

平成30年度財務委員会は、第1回を3月19日に、第2回を12月18日に東京都千代田区麹町のコングレ東京本社内の会議室で開催し、対面参加できない先生はwebで参加しました。尚、平成30年7月のメール審議にて、山本が委員長に選任されました。

第1回では平成29年度収支決算と平成30年度予算案を理事会に提出し、4月25日の代議員会で承認されました。

平成29年度収入に関して、従来未入金については「未収会費」として計上していましたが、当年度から入金の事実に基づく方法に変更されたため会費収入が予算より減少しましたが、会費の回収率は例年通りであり、予算より約180万円の減収となりました。支出に関しては、専門医関連を中心に執行されない事業費と「未収会費」に関する会計方針の変更などに伴い、約1830万円の減少となりました。これらにより、収支では約960万円の赤字予定が約700万円の黒字となっています。

平成30年度予算案からは学術集会の収支が組み込まれ、開催収入約7840万円が計上されたため、収入は約1億3770万円、支出は約1億5220万円予定と会計規模が倍増しています。

第2回では10月末での平成30年度収支状況と2019年度予算案が報告されました。

第61回学術集会収支は未確定ですが、収入は予算と大差なく達成される見通しであり、支出は事業費として委員会費・出版関連費用など減少が見込まれ、管理・事務費については概ね予定通りであり、収支としては黒字となる見込みです。

長尾税理士より、学術集会収支が日手会学会収支に組み込まれることに伴う法人税・消費税申告について説明があり、平成30年度から租税公課として予算案に含めることになりました。

2019年度事業計画案として、広報・渉外委員会から手外科の認知度向上を目指す新規事業、情報システム委員会から日手会カード新規発行やオンライン決済などが計上され、合計約5130万円となっています。収入は約1億4440万円(学術集会開催収入 約8200万を含む)が見込まれており、支出で

は委員会費の30%減額や出版関連費用の減額が予定されていますが、機関誌発行費が論文数増加に伴い約130万円増額しています。租税公課として法人税・消費税約500万円を想定しており、すべての事業が行われるとすると、約900万円の赤字となる見込みです。また、国際手外科学会連合日本支部の収支も、今後は日本手外科学会収支に取り込む予定です。

今後とも、会員皆様の御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

教育研修委員会

委員長 **金谷耕平**

平成30年度教育研修委員会のメンバーは、担当理事に砂川融先生、委員に大野義幸、川崎恵吉、坂本相哲、島田賢一、中村俊康、成島三長、村田景一各先生（五十音順）と委員長に金谷耕平で構成されております。

本年度も例年通り、当委員会の主たる活動である春期ならびに秋期教育研修会を開催しています。第24回春期教育研修会は、アステラス製薬株式会社の協力を得て、第61回学術集会の翌日の4月28日（土）に京王プラザホテルで開催されました。6題の講演が行われ、参加人数は180名でした。第24回秋期教育研修会は、旭化成ファーマ株式会社の協力で、9月1日（土）・2日（日）に金沢商工会議所で開催されました。参加人数は194名で、10題の講演と1題のランチョンセミナーが行われました。参加人数は例年並みですが、いつもの年より活発な討論が行われたような印象です。

教育研修委員会では研修会の講師の選抜を委員の推薦で決めていましたが、それには限界があるということで、昨年より代議員の先生方からの自薦・他薦をお願いしています。平成31年度の研修会では、推薦された多くの先生をお呼びできると思います。来年度以降も継続して推薦を受け付けておりますので、よろしくお願いいたします。

平成31年度は、第25回春期研修会を第62回学術集会の翌日の4月20日（土）に札幌で、第25回秋期研修会を8月31日（土）・9月1日（日）に再び札幌で開催する予定です。

平成31年度は第4回カダバーワークショップの開催年でもあります。秋期教育研修会の前の8月29日（木）・30日（金）の2日間に札幌医大解剖学教室で行われる予定です。第3回同様、平日開催ですが、秋期研修会・カダバーワークショップはともに札幌で開催されますので、両方を受講された方は4日間どっぴりと手外科研修に浸ることができます。札幌医大では、私が学生だった30数年前から使用されていた解剖実習室が去年リニューアルされ、より快適な実習室となっています。また、カダバーワークショップで用いられる撮子やハサミなどの器具類について、多くの参加者から使い勝手や数量についての不満の声が上がっておりましたが、この度、日手会で購入することになりました。最低限の手外科用の器具をそろえることができると思います。

平成31年度は、春期・秋期教育研修会、カダバーワークショップのすべてが札幌開催となる予定です。多くの方々に来道していただけることを期待しています。教育研修委員会では、できるだけ皆様の意見を取り入れながら、よりよい研修システムの構築に全力を注いでおります。今後ともご支援を宜しくお願い申し上げます。

（文責：教育研修委員会委員長 金谷耕平）

編集委員会

委員長 谷 口 泰 徳

2018年度の編集委員会の活動報告をさせていただきます。編集委員会の担当理事は4月より坪川直人より面川床平に交代しました(敬称略)。年度最初の編集委員は、池口良輔、池田全良、江尻荘一、岡田貴充、長田伝重、河村健二、佐藤和毅、関谷勇人、峠 康、長岡正宏、西田圭一郎、西田淳、二村昭元、古川洋志、堀井恵美子、松崎浩徳、松村一、村瀬 剛、森谷浩治(敬称略)の19名でしたが、8月より、入江弘基、岩部昌平、田鹿毅、林原雅子、藤田浩二(敬称略)5名の先生方が新たに加わりました。

2018年度の第一回編集委員会を、第61回日本手外科学会学術集会開催期間中の2018年4月26日に京王プラザホテルで開催し、各議題について審議を行いました。編集委員会の主要な事業は、(1)学会奨励賞「田島達也賞、津下健哉賞(50音順)」の審査、選定と(2)日本手外科学会雑誌の発行です。

学会奨励賞「田島達也賞、津下健哉賞(50音順)」は、2018年に若手の手外科医の奨励、育成を目的として創設されました。今回は第二回学会奨励賞を編集委員会で公募し、候補者2名を選び理事会での承認を得ました。その結果、第二回の田島達也賞は、埼玉医科大学病院整形外科の大村泰人先生に、津下健哉賞は医真会八尾総合病院整形外科の速水直生先生に決まりました。両先生には2019年4月17日に札幌市で開催される日手会総会で表彰状が授与される予定です。

今年度の投稿受付論文数は2019年2月の時点で、総数315編で、採用295編、不採用15編、審査中5編です。昨年同時期の総数250編と比較し65編ほど増加しています。学術集会発表論文、自由投稿論文とも増加傾向にあります。投稿論文数が増加した分、投稿論文に学術研究論文の体裁をなしていない不良な論文が増加しています。そのため、査読者、編集委員は論文の査読審査、指導に大変なストレスを感じている状況にあります。査読者、編集委員からの修正指導には限界がありますので、共同演者の指導医の先生方から、投稿前の十分な修正、校正を宜しくお願い致します。

本年度の日手会雑誌の35巻オンラインジャーナルは、2号:2018年11月26日、3号:12月17日、4号:2019年1月28日、5号は2月25日と順調に公開発行され、6号は4月15日の発行を予定しております。全代議員の先生方に年間2~3編の査読をお願いしておりますが、オンラインジャーナルが予定日に公開されるように引き続き、査読業務を行って頂きますように宜しくお願い申し上げます。では会員の皆様からの多くの論文投稿をお待ちしております。

より質の高い日本手外科学会雑誌の発行に向けて編集委員一同、一層の努力をしておりますので、引き続き学会員の皆様には今後ともご支援、ご協力を宜しくお願い申し上げます。

機能評価委員会

担当理事 中 村 俊 康

委員長 洪 淑 貴

機能評価委員会では中村俊康理事のもと、委員長洪以下5名で活動しています。

前期からの継続事業としては、精密知覚検査(SWテスト)マニュアルを日本ハンドセラピィ学会及び本学会理事会の承認を得た後、日手会HPに掲載することになりました。日手会標準の指角度計に

については、試作品の検証し、現存の2度刻みの角度計を推奨することになりました。また、日手会理事会の承認を得て、本学会推奨の握力計をJAMARとすることになりました。

今年度の新規事業としては、平成30年度学術研究プロジェクトに選ばれた手指変形性関節症機能評価の結果を待って、当委員会で追試を行う予定です。また、指用デジタル角度計の検証作業をおこなう予定です。

国際委員会

委員長 **服部 泰典**

国際委員会は柿木良介担当理事、稲垣克記アドバイザーのもと、岡田充弘、金谷文則、建部将広、平田仁、村田景一、吉田綾、服部泰典の7名の委員から構成されます。今年度の活動の概要を報告します。

ASSH (米国)、HKSSH (香港)、KSSH (韓国)、TSSH (台湾) Travelling Fellowを選出

2019年のJSSH-ASSH Travelling Fellowとして岩本卓士先生(慶應義塾大学整形外科)、上原浩介先生(東京大学医学部整形外科)を、Asian Exchange Travelling Fellowとして藤原祐樹先生(名古屋掖済会病院整形外科)、兒玉祥先生(広島大学医歯薬保健学研究科整形外科学)、内藤聖人先生(順天堂大学医学部整形外科)を選出しました。藤原先生はJSSH-HKSSH Fellowとして香港を、兒玉先生はJSSH-KSSH Fellowとして韓国を、内藤聖人先生はJSSH-TSSH Fellowとして台湾をそれぞれ訪問することになりました。英語でのプレゼンテーションと質疑応答を取り入れた選考も3年目になりました。候補者の業績はみなすばらしく、competitionは厳しくなる一方で、選考に苦慮しました。今後も意欲溢れる若手会員の応募を期待しております。

HKSSH Fellow来日

平成31年4月18、19日に岩崎倫政会長のもとに札幌で開催される第62回日本手外科学会学術集会には、2019 Bunnell Fellowに選出されたDr Jennifer Waljee (University of Michigan, USA)、HKSSH FellowとしてDr. Michael Chu-Kay MAK (The Chinese University of Hong Kong)、KSSH FellowとしてDr. Dong Chul Lee (Gwangmyeong Seongae Hospital, Korea)、TSSH FellowとしてDr. Hui-Kuang Huang (Taiwan) が来日されます。岩崎会長のご高配により、学術集会ではTravelling Fellow Sessionが設けられ、日本のフェローと共に発表をしていただきます。Fellowは日本各地の施設を見学されますので、ホストの先生にはどうぞよろしくお願いたします。

第7回日米合同手外科会議

第7回日米合同手外科会議は、2021年3月27日～29日に日手会の主催でハワイで開催される予定です。開催場所の詳細やプログラムに関しては、検討中です。

広報渉外委員会

委員長 白井久也

平成30年度の広報渉外委員会は、平瀬雄一担当理事、岡崎真人、佐竹寛史、辻英樹、大江隆史、岸陽子の各委員と私の計7名で委員会の活動をしてきました。第1回委員会は日手会会期中の平成30年4月に、第2回委員会は9月にWEB会議で、第3回委員会は12月にWEB会議で、第4回委員会は肘学会期間中の平成31年2月に行いました。

当委員会の主たる役割である日手会ニュースの発刊として、第49号を平成30年3月に、号外を8月に、第50号を12月に発刊しました。第48号から始まった“バトンリレー”シリーズは重鎮の先生方にエッセイを執筆いただいておりますが、軌道に乗り第3回まで進めることができました。

手外科シリーズの手外科パンフレットはホームページの“一般の皆様”の中の“代表的な手外科疾患”として掲載され誰でも閲覧、印刷が可能です。会員、会員外の方々から手外科シリーズの挿絵を使用したいという問い合わせがしばしばあります。著作権は日手会にあるため委員会でチェックして転載の許可、非許可をその都度出しています。また日手会のロゴマーク使用を認めるかの問題も浮上し、検討しているところです。手外科シリーズは今回新しく、No.32「手指の骨折」とNo.33「橈骨神経麻痺」が加わりました。さらに以前からの古いNoの見直し、修正作業も継続しています。

日本整形外科学会へのシンポジウム、パネルへの提言を毎年行っています。2020年5月の第93回日整会には、手関節鏡手術の進歩；どこまで見えるのか治せるのか、と難治性の舟状骨偽関節；治療の最前線、の2項目を選び手外科学会から推薦しました。

手外科の認知度を上げることも当委員会の役割です。新たな第1歩として大江委員が中心となり手外科の認知度のアンケート調査を行いました。世間一般からはまだまだ手外科の認知度が低いことが判明しましたが、限られた予算で知名度をいかに上げるかは今後の課題となっています。

第30回日本医学会総会2019中部が2019年4月26日から29日に名古屋で開催されます。分科会特別展示に日手会からも展示するよう加藤理事長から指示をうけ、日手会の歴史や最前線を載せたポスターを作成しました。医学会総会で展示されますので整形外科以外の医師への認知度向上に貢献できると思います。

日手会のホームページの英語版作成をどの程度進めるかに関して検討中です。現在は会員の皆様の中の▲Englishを開くとprofileなどが英語で表記されています。このページも古いままであったので更新しました。今後、日手会を開催される会長に学術総会の英語版の案内作成をお願いする方向ですが、まだ未決定事項です。

今後も皆様のご理解とご指導の程、よろしく申し上げます。

社会保険等委員会

委員長 亀山 真

社会保険等委員会は大江担当理事以下、池上アドバイザー、岩瀬、島田、高瀬、鳥谷部、光安、森田、および委員長亀山の計9名で活動を行っております。

◆外保連活動

各種委員会(手術、実務、検査、処置、麻酔、広報、ICD11)に委員を配し活動を行っております。2020年度診療報酬改定に向けては、要望項目アンケートに乗せる要望内容の検討をいたしました。現在、外保連試案に登録している技術の要望内容を修正をする際には、主学会から申請することが原則となっています。しかし現状は主学会の大半が日整会になっており、各専門領域の技術内容を修正することが困難な状況です。そこで昨年10月6日開催の日本整形外科学会社会保険関連学会合同会議において、特に手外科領域の技術については本学会が日整会から主学会業務を引き継ぐことを了解しました。

◆2020年度診療報酬改訂に向けての活動

次年度改定として①知覚再教育、②前腕から手根部における腱縫合加算、③カスタムメイドガイドを用いた骨切り術、④カスタムメイドガイドを用いた変形治癒骨折矯正術、⑤手術の通則14の留意事項(4)指に係る同一手術野の範囲アの(イ)の記述の中の「の「1」指(手、足)」の語句」と「の「3」中の指(手、足)」の語句」を削除、⑥靭帯性腱鞘内注射、⑦関節鏡下手根管開放術の増点、を要望項目アンケートに登録し、昨年11月末に外保連を通じて厚労省へ提出しました。

◆エピネフリン含有キシロカインの指への麻酔禁忌を変更する要望

エピネフリン含有キシロカインの指への麻酔は添付文書で禁忌とされていますが、近年の本学会での報告の現状を踏まえ、これを慎重投与に変更する要望を厚労省保健局医療安全課へ行っております。昨年8月30日に大江担当理事、池上アドバイザー、島田委員、委員長(亀山)が厚労省保健局医療安全課およびPMDAと面談し、本案件の安全性に関するエビデンスについて、2回目のヒアリングを受けました。今後は学会として実態調査が必要になる見込みですが、調査内容についてはPMDAで検討していただいております。

◆学術集会ランチョンセミナー

昨年と同様、第62回学術集会で亀山(委員長)による講演を予定しております。内容は、保険診療の理解のための解説(平成30年度版)、全国整形外科保険審査委員会(全審会)の討議内容、診療報酬算定上のQ&A、等について講演をさせていただく予定です。今後も学会員の皆様に社会保険に関する有益な情報を提供できればと考えております。

先天異常委員会

担当理事 島田 賢一
委員長 橋本 一郎

先天異常委員会の主な活動内容は、手の先天異常懇話会の開催、日手会手の先天異常分類マニュアルの再検討、手の先天異常症例相談窓口の運営、「代表的な手外科疾患」パンフレットの作成、などがあります。本委員会活動により先天異常手の診療に少しでも役立つ情報を発信できることを目標にしています。

手の先天異常懇話会

第62回日本手外科学会学術集会の期間中に、岩崎倫政会長のご配慮により第57回手の先天異常懇話会を開催する予定です。今回のテーマは「母指多指症」に対する手術を中心とした治療法です。京都大学 形成外科 齊藤晋先生には「母指多指症の分類および関連する解剖学的異常について」を、埼玉成恵会病院・埼玉手外科研究所 福本恵三先生には「母指多指症の分類と治療 -Current Concept-」を講演していただきます。本懇話会は日本手外科学会と日本整形外科学会の専門医教育研修単位、日本形成外科学会の専門医資格更新単位を申請しております。また、本委員会では「手の先天異常懇話会のあり方」について、出席者へのアンケートを行い、講演内容の難易度や症例検討の必要性、適切な開催時間などを調査して、懇話会が会員にとって魅力的となるために検討を続けています。

日手会手の先天異常分類マニュアルの再検討

日手会手の先天異常分類マニュアル(改訂版2012年)の改訂に向けて、問題点の検討を行っています。前回の第56回手の先天異常懇話会において、会員のみなさまからご意見をいただくためにアンケートを実施しており、分析を行っています。

手の先天異常症例相談窓口の運営

昨年度に日手会ホームページ上で開設された「先天異常症例相談窓口」では、相談症例はまだ少ないですが、症例相談の運営を行っています。

「代表的な手外科疾患」パンフレットの作成

日手会ホームページに掲載されている「代表的な手外科疾患」に「母指多指症」と「強剛母指」の修正版を掲載しました。「握り母指症」と「斜指症」のパンフレットを作成し追加掲載しましたのでご覧ください。

これからもみなさまのご支援とご指導をよろしくお願いいたします。

先天異常委員会：島田賢一担当理事、上里涼子委員、四宮陸雄委員、関敦仁委員、鳥山和宏委員、牧野仁美委員、橋本一郎

倫理利益相反委員会

委員長 恵 木 丈

平成30年度倫理利益相反委員会のメンバーは、担当理事に酒井昭典先生(産業医科大学 整形外科)、アドバイザーに塚田敬義先生(岐阜大学大学院医学系研究科)、委員に鈴木克侍先生(藤田医科大学 整形外科)、辻本 律先生(長崎大学病院 整形外科)、福本恵三先生(埼玉成恵会病院・埼玉手外科研究所)(五十音順)、外部から深谷和子委員(東京学芸大学名誉教授)、山我美佳委員(IQVIAサービス ジャパン株式会社)をお招きし、委員長に恵木 丈(大阪府済生会中津病院 整形外科)で

構成されています。深谷委員におかれましては、今年度で委員を御辞退されました。長きに渡りありがとうございます。

当委員会の業務は、全代議員の利益相反に関して審査を行う事であり、特に学会役員や委員会委員就任に関して、倫理的問題がないかを各自提出された自己申告書を元に審査を行い、その結果を理事会に具申することです。本年度は9月23日に深谷先生を除く全員が東京駅前カンファレンスセンターに参集し、審査を行い、疑義がある場合はその確認を行い、審査結果を上申しました。

日本手外科学会新入会審査も当委員会の業務です。それに関しては毎月メール審議を行なっています。毎月10人程度の入会希望者の審査を行っています。

昨年公布された「臨床研究法」に関して、医学研究公表のためのコンプライアンスが従来よりも求められるようになります。当委員会としても、先輩の諸先生方により長年にわたり培われてきた学会の価値、信頼が毀損することの無いように努めてまいります。

学術研究プロジェクト委員会

委員長 高木 誠 司

構成

日本手外科学会学術研究プロジェクト委員会の構成メンバーは、酒井昭典担当理事、仲沢弘明アドバイザー、高木誠司委員長、釜野雅行委員、鈴木茂彦委員、藤岡宏幸委員、村松慶一委員です。

活動内容

1. 2018年度日本手外科学会学術研究プロジェクトの選考

2018年10月28日にTKP東京駅日本橋カンファレンスセンターにて、2018年度学術研究プロジェクト委員会を開催し、表題の選考を行いました。応募は8件あり、応募テーマ別の内訳では、(1) 手外科学分野の高いエビデンスが得られる臨床研究が4件、(2) 手の先天異常が2件、(3) 絞扼性神経障害が2件の応募でした。審議の結果、大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学の岡久仁洋先生による「橈骨遠位端骨折後変形による変形性手関節症発症メカニズムの解明」、岐阜大学医学部整形外科の河村真吾先生による「多発性軟骨性外骨腫症の手指病変に対する新規分類作成に向けた画像解析研究」(但し条件付き)、国立成育医療研究センター臓器・運動器病態外科部整形外科の高木岳彦先生による「先天性横軸形成障害(前腕欠損、上腕欠損)に対する筋電義手の開発」の3件が選出され、理事会でも承認されました。

2. 2019年度の学術研究プロジェクトのテーマについて

本年度と同じく、(1) 手外科学分野の高いエビデンスが得られる臨床研究、(2) 手の先天異常、(3) 絞扼性神経障害の3つのテーマで募集することとなりました。

3. 学術研究プロジェクト進捗状況報告書のチェック

日本手外科学会学術研究プロジェクトに選ばれますと、毎年プロジェクト研究の進捗状況を報告

し、プロジェクト終了から1年以内にプロジェクトの結果を日本手外科学会学術集会で発表し、かつ、日手会雑誌もしくは英文雑誌 (impact factorの付与された雑誌を強く薦める) で公表することが義務づけられております。委員会では、研究者からの報告書に対して、研究の進捗状況・助成金の使途・学会や論文報告の有無などをチェックしております。本来は2018年10月28日の委員会の場でこれが行われるはずでしたが、書類の取りまとめが遅れており、2019年1月末の時点でまだこれが終了していません。引き続き活動を行ってまいります。

4. 第62回日本形成外科学会総会・学術集会への演者推薦

第62回日本形成外科学会総会・学術集会において関連領域学会のシンポジウムが開かれることとなり、その関連領域学会のひとつとして日本手外科学会に声がかかりました。手外科学会の沿革や専門医制度について、それと手外科に関する教育講演、といった内容で数名の演者を候補に挙げさせて頂き、日手会理事会承認のもと、第62回日本形成外科学会総会・学術集会事務局の方に推薦させて頂きました。

今後とも、学術研究費の有効利用と手外科研究者のモチベーションの向上につながるプロジェクトの実施を目指し努力いたします。皆様のご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

専門医制度委員会 (手外科専門医検討委員会)

委員長 田中克己

◇委員会の現状

本委員会は専門医制度を統括する目的で、カリキュラム委員会、専門医資格認定委員会、専門医試験委員会ならびに施設認定委員会の各委員会と連携を取りながら専門医制度の総合的な運営を行うものとして位置づけられております。

来るべき日本手外科学会新専門医制度の構築に向けて現在、制度作りを進めておりますが、日本専門医機構からは関連する基本領域学会と綿密な連携を図り、サブスペシャリティ学会との間に検討委員会を設置し、専門医研修内容を調整し、新しい専門医制度を設計運営するように指示が出されました。これを受けて2017年度に日本整形外科学会、日本形成外科学会、日本手外科学会の三学会からなる手外科専門医検討委員会を発足させ、しばらくはこの委員会と専門医制度委員会が合同の形をとり、実際の活動は手外科専門医検討委員会を中心に活動することになっています。

◇委員会構成

2018年度の手外科専門医検討委員会の構成としては、専門医制度委員会から加藤博之担当理事(理事長)、朝戸裕貴委員、面川庄平委員、亀井 譲委員、酒井昭典委員、砂川 融委員、平田 仁委員、三上容司委員、矢島弘嗣委員と田中克己が入り日整会から池上博泰委員、原田 繁委員、日形会から島田賢一委員、鈴木茂彦委員が加わっていただき、田中が委員長として取りまとめを行っております。

◇活動内容と今後の方針

日本手外科学会の新専門医制度はすでに更新の時期を迎えておりますが、日本専門医機構の指示により、更新は行われておらず、新制度の承認までは現状維持の形となっております。2017年度には日本手外科学会は新専門医制度としては、すでに従来通りの研修カリキュラム制を基本的な制度とすることが確認・決定されております。専門医制度の骨格は変えずに新制度への移行に向けて準備を進めているところです。

日本専門医機構からのサブスペシャル領域審査のスケジュールが発表されました。日本手外科学会は専門医機構から要請のありました調査用紙に対して、本年1月末までに回答を行い、来たるべき事前審査に向けて準備を行っております。3月初めには説明会の開催、事前審査と続き、4月～7月にはサブスペシャル領域の専門医制度整備基準の申請と審査が行われます。その後認定・承認作業を経て、9月頃には正式に日本専門医機構認定のサブスペシャル領域の専攻医研修に関して公表される見込みです。

基本領域の専門医制度とともに社会の変化に対応し、患者・家族にとっても、また、手外科医にとっても、さらに良質な医療につながるような制度となるように日々努めております。専門医制度の完成にはもう少し時間が必要な状態ですが、進捗状況を含めて可能な限り報告してまいります。今後とも会員諸氏のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

専門医資格認定委員会

委員長 石河利之

【委員会概要】

専門医資格認定委員会は、今年度は委員長が交代し石河利之が新委員長を拝命致しました。前委員長の中尾悦宏先生にはアドバイザーにご就任頂きました。また委員も3名交代となり、亀井 譲 担当理事のもと、松井 雄一郎 委員、横田 淳司 委員、加地 良雄 委員、國吉 一樹 委員、児玉 成人 委員、高木 岳彦 委員、黒川 正人委員、野口 政隆 委員、松村 一 委員の12名で活動いたしました。専門医制度や受験資格、更新申請の要件等についての様々な問い合わせに対応し、10月以降、専門医試験受験資格申請、資格更新申請について審査、審議し、また相談医の推薦についても審議致しました。

【活動と審査報告】

早い時期より専門医試験受験や更新の要件、手続きについて多くの質問が事務局に寄せられ、随時回答いたしました。7月27日、ホームページに「第10回手外科専門医試験受験資格認定申請」、「専門医更新申請」について告知を行いました。10月19日までの申請期間に専門医試験受験資格認定には60名の、また専門医資格更新には対象者132名のうち117名の申請がありました。疾病による猶予希望の1名を除き、更新対象でありながら期間内に申請を行われなかった14名には専門医継続の意志の有無を書簡で確認し、10名が更新希望で遅れて手続きを行われ、4名は更新を希望されませんでした。更新申請者は127名となりました。猶予希望については委員会会議の結果、猶予を認める

ことに致しました。

事務局で申請書類のコピーを作成し、11月14日に各委員に郵送し審査を開始しました。結果を事務局でまとめ、委員間で共有し、11月26日の第1回web会議で試験受験資格について審議し、60名中問題なく資格認定と判定したのが12名、書類不備や不足、不適切な病歴要約症例の提出や考察不足等を理由に保留48名と判定しました。そのうち37名は書類上の軽微な不備や足りない画像資料を追加提出し、それらが適切であれば認定となるもの、9名はいくつかの症例の再提出(差し替え等)が必要であるもの、5名は書類の不備等が多すぎて本来ならその時点で不合格としてもやむを得ない状態のものでした。それら全てについて訂正後の再提出を依頼しました。また12月10日の第2回web会議では更新資格について審議し、資格認定123名、保留4名という結果でした。審議で保留判定となった申請者には、早急に書類の修正、再作成、不足書類の提出、適切な病歴要約症例への差し替え等を求め、委員で手分けして審査を継続いたしました。これらの手続きを経て、1月12日午後、東京で委員会会議を開催して慎重に審議し、受験申請では60名中57名において、更新申請では127名全員において資格を満たしていると判定いたしました。ただし更新申請の2名において教育研修単位が不足しておりましたが2018年度中に不足単位を受講する条件にて仮認定とし、2月8～9日に開催されました日本肘関節学会にて単位受講をされた後に認定と致しました。また相談医について本年度は対象となる会員はおられませんでした。今後は審査過程で課題となった解釈に誤解が生じやすい細則、FAQや提出書類記入例の数項目について審議し、改訂・修正を行う予定です。

今年は初回審議での受験資格審査では申請者の8割を保留扱いとせざるを得ませんでした。国民に信頼される質の高い専門医であること、またその制度の存続、発展のためにもより一層丁寧な準備、入念な書類作成が望まれます。しかしながら、この状況は申請者の不注意もさることながら、申請様式、申請におけるシステム自体にも問題があると考えざるを得ません。また紙ベースの書類の送付についても事務処理上の煩雑さを増やす一因となっているようです。今後は記入例、FAQの改善・追加、わかりやすい申請様式の改良に加えてWeb上で完結する申請方法を検討すべきだと考えています。更新審査においては申請忘れが7%、書類の不備等で保留となったのは3%であり申請時期のリマインドを改善していきたいと考えています。

また専門医認定後には5年毎に更新が必要と定められていますが、現在は事実上6年となってしまうています。2009年に第1回の専門医認定が行われた際には認定年月日が5月15日でした。更新は5年後の年度末の2015年3月31日と定められ、以後更新は年度末の3月31日に統一されていましたが、認定年月日が年ごとに違ったことから徐々に認定期間が伸びることとなり2016年に認定が3月に行われた時より更新までの期間が6年となってしまうています。今年度以降、これを5年に是正することとなり、今年度の認定については初回更新が昨年度の認定と同じ2024年3月31日となりました。今年度の受験を予定されている先生方は更新時期にご注意ください。

最後になりましたが、ご多忙の中、審査をして頂いた委員の先生方に深謝致します。そして御協力を賜りました多くの学会員の先生方に心より感謝いたします。引き続きお力添えをよろしくお願いいたします。また事務局の皆さまには人数、時間の限られた中、いつも大変お世話になっております。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

施設認定委員会

委員長 副島 修

平成30年度に入り委員の交代がありました。担当理事の坪川直人先生、委員長の藤尾圭司先生および坂井健介先生が任期終了され、担当理事に信田進吾(新任)、委員長に副島 修、委員として長田龍介(新任)・岸 陽子・川勝基久・森田哲正・和田卓郎(新任)(敬称略)のメンバーとなりました。主な活動は、認定研修施設に関する規則(専門医制度規則第7章、第20-26条)に基づく手外科専門医施設の新規および更新認定作業であり、現在のところは多くの専門医取得希望者が研修しやすいよう出来るだけ研修施設を認める方向で引き続き努力しております。

年度前半に申請のあった11件(新規6件、異動特例5件)について先ず委員でメール審議を行いました。本格的な施設更新申請は10-11月にあり、更新(268件)・新規(15件)・異動特例(4件)の計287件の審査を委員6名が3班に分かれて、12月末より年末年始返上でメール審議いたしました。ご協力いただいた委員の先生方や事務局の皆様には、深く感謝申し上げます。結果は概ね問題はありませんでしたが、①学習会検討会無、②カリキュラムに基づく研修無、③手術症例数不足(基幹100以上、関連30以上)で問題となった施設が10件、また異動特例で専門医異動後1年経過後の申請か否か書類だけで判断できない施設も1件ありました。それぞれ事務局より再度確認が取れ次第に承認を行うことにいたしました。書類不備の申請も少なからずあり事務局業務を圧迫しておりますので、今後申請される施設代表の先生におかれましては今一度規則を熟読の上で申請されますようお願い致します。

前述のようにこれまでの委員会の方針として比較的基準を緩めて申請を認めてまいりましたが、以前より問題となっていた手外科学習会/検討会とは何か?カリキュラムに基づく研修が本当に行われているか?手術症例数は現状で問題ないか?などなど、今後理事会での新たな研修施設に関する構想を踏まえながら議論をしていきたいと考えております。

専門医試験委員会

担当理事 砂川 融

委員長 田中利和

1) 委員会メンバー

専門医試験委員会は砂川融担当理事、佐野和史アドバイザー、小林由香委員、池田和夫委員、清川兼輔委員、古川洋志委員、篠原孝明委員、長尾聡哉委員、南野光彦委員、西田淳委員、山崎宏委員、鳥山和宏委員、と委員長の田中利和の13名で活動しております。当委員会では年間6回の会議を経て専門医試験問題を作成し、年次専門医試験を実施することを業務としております。

2) 第10回専門医試験を終えて

平成29年度第10回専門医試験は平成30年3月21日(春分の日)に開催しました。受験者数は46名(整

形外科41名、形成外科5名)で前年度より27名減少し例年通りの受験者となり、委員会メンバーだけでの対応が可能となりました。第9回専門医試験より、新たに筆答問題が一部分野別選択制(共通問題40題と形成・整形外科学分野別選択問題各4題)となりましたが、今回も大きな混乱もなく終了しました。分野別選択問題は受験者の基盤学会に関わらず選択可能ですが、整形外科分野選択者は43名(うち整形専門医39名、形成専門医4名)、形成分野選択者は3名(うち整形専門医2名、形成専門医1名)で、基盤学会にかかわらず、得意な分野を選択しているのが特徴的でした。試験結果は、平均点70.4点、合格率91%と昨年に比べ平均点で約10点、合格率6%の低下がみられました。



3) 第11回専門医試験にむけて

① 既出問題に対する質問と回答、過去3年分の公開問題の疑義洗い出し作業

昨年度、閲覧可能となっているホームページ上の過去3年分の試験問題(2008～2010年度(第1～3回))の洗い出し作業を行いました。しかし過去に出題されていないにもかかわらず既出問題のようにHP上「専門医更新審査申請のお知らせ」のバナーの平成28年4月19日記載の追加公開についての中に『④2011年公開筆答問題9題(解答付)(2011年1月25日公開):資料4』の記載があり、前回の委員会での議論がなされておらず、受験者に混乱を招きました。今後削除して、HP上の試験情報の整理を行う方向で行く予定です。

② 第11回専門医試験開催

平成30年度第11回専門医試験は例年同様に平成31年3月21日(春分の日)にステーションコンファレンス東京で開催いたします。今回の受験者は57名の予定ですので、当委員会メンバーに加えまして、2名程度の委員経験者の援助が必要と思われます。

昨年より筆答問題は一部分野別選択制となりましたが、当委員会では、各々の基盤学会を軸とした専門性の高い選択問題を作成する一方で、共通問題の中で手外科診療に携わる形成外科医と整形外科医が共有すべき知識をしっかりと確認できる問題作りを行っています。

カリキュラム委員会

委員長 加地良雄

1. 構成員

カリキュラム委員会では平成30年4月に構成員の変更があり、田中克己担当理事がご退任され、島田賢一先生が新たに担当理事にご就任されました。これにより現在、島田賢一担当理事のもと、吉本

信也委員、石河利広委員、松田健委員、大井宏之委員、坂野裕昭委員、加地良雄委員長の6名の委員で活動を行っています。

2. 活動内容

平成30年4月の学術集会開催時に委員会を開催しました、それ以外ではweb会議で主に教育研修講演申請の審査を行っています。平成30年2月から平成31年1月の間に285件の申請があり、278件を認定、7件を非認定といたしました。

3. 教育研修講演申請にあたってのお願い

申請のうち非認定となった7件は手外科との関連を見いだせなかった講演でした。この他にも演題名だけでは手外科との関連を判断できず、抄録の提出をお願いしたりするなど審査に手間と時間を要した事例が散見されました。以前よりお願いしていることではありますが、教育研修講演申請にあたっては、手外科との関連を示す文言を演題名に含めていただきますようお願い致します。

なお、このような問題を改善するため、委員会での審議および理事会の承認を経て、今年度より申請書の演題名記載欄に「演題名に肘関節、手外科、手、指、上肢の機能再建および基礎研究、等の手外科領域に関連したものであることが分かるようにタイトルを明記してください。」という文章を加えさせて頂いています。演題名、抄録のみでは手外科との関連を示すことが難しい場合には、このような審査用の要旨(手外科との関連を示す説明文)の添付をお願い致します。

申請頂いた演題にはできる限り単位を付与する方針にはしていますが、迅速かつスムーズな審査のため、皆様のご協力をお願い致します。

情報システム委員会

委員長 西浦康正

平成29年3月25日に平成29年度第2回情報システム委員会を開催し、日手会全体の新システムを導入しKCSと事務局の二元管理を解消すること、当面e学会には加入しないこと、旧Hands Nowは会員管理システムと切り離しストリーミング配信を開始する(現在は配信が開始されている)ことを決定しました。新システムは、日整会システムとの連携を前提とし、そのためには医籍登録番号の登録が必須であるため、新規正会員の入会申込書に医籍登録番号を記入する欄を設けることとしました。また、正会員から医籍登録番号を収集するのは、マイページから行うことを前提とし、第61回学術集会でアナウンスを行うとともに、日手会ホームページへの掲載や会員へのメール配信を行いました。医籍登録番号とメールアドレスが必須となりますことを御承知おきください。そのほか、新システムの開発・運用のためにワーキンググループ(WG)を結成し検討することになりました。

WGのメンバーは、加藤博之理事長、中村俊康理事、西浦委員長、平田副理事長、鈴木拓、松浦佑介、宮脇剛司、渡辺頼勝となりました。今年度は2回WGを開催し、新システムのデモ版を視聴し、現在メール審議で検討しているところです。

平成30年度の情報システム委員会は、担当理事：中村俊康、委員長：西浦康正、委員：大江 隆史、面川 庄平、加藤 博之、亀井 譲、島田 賢一、砂川 融、信田 進吾、平田 仁の出席で、平成31年1月12日に委員会を開き、情報システムについて審議しました。

日整会システムと連携するに当たり、日形会会員に対しては、日手会カードを新規で発行(2,000円/枚)し配布、カード発行費用については日形会員に負担を求めず、日手会負担で発行することが決定されました。この日手会カードは日整会カードを持っていない正会員に発行されるものであり、日整会カードを持っている日整会会員には発行されません。日手会カードの図案に関しましては、メール審議で決定し、メール配信および手紙による周知を行うこととしました。

新システムの導入により、今後は、日整会システムとの連携を行うこととなり、学会参加登録や教育研修単位の登録が電子化されることとなります。

また、事務局から専門医制度に関しての電子化の要望があり、今後、第2フェーズとして検討していくことが決定されました。

上記のように、今回、新システムが導入されることになりましたが、システムの構築・導入には財政的な問題があります。できるだけ使い勝手の良いシステムになるように検討していますが、なかなかむずかしい面もあります。皆様の御理解と御協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

用語委員会

委員長 加藤直樹

平成30年度の利用語委員会は、加藤博之理事の後任として就任された信田進吾理事を中心に、新たに松田健委員、原友紀委員、松浦佑介委員を利用語委員に迎え、残留の鳥谷部荘八委員、湯川昌広委員、そして前委員長である後藤渉委員にはアドバイザーとして加わって頂き、計8名で活動しました。

今年度の作業は、まず前年度の委員会からの引き継ぎ事項である整形外科学用語集第8版との整合性についての検討から行いました。本作業は日本整形外科学会から整形外科学用語集第8版に対する意見と、次の第9版に対する要望を問われたことから始まった作業であり、日本整形外科学会用語集に採用してほしい手外科関連用語を提案する作業や日本整形外科学会用語集に準じて手外科用語集を修正する作業を同時に行っています。全ての用語についての確認を委員会で議論しながら進めていくため、かなりの時間が費やされましたが、もう少しで欧和の部についての検討がほぼ終了する予定です。今後は和欧の部についての整合性をとる作業を進めて参ります。

次に、会員からの手外科用語集に対する修正や要望を受け付ける「用語集に関するQ & A」ですが、今年度は特に修正要望はございませんでした。おそらく会員における認知度が低いことが原因の1つと思われますので、用語委員会としては日手会用語集に加えて、「用語集に関するQ & A」についても今後アナウンスを徹底していきたいと考えています。また、これまで問い合わせを頂いた用語については委員会において検討し、ある程度まとまったところで、修正版を日手会HPの会員専用ページにアップする予定です。是非会員の皆様からの多数の御指摘をお待ちしております。

三つ目は、Green's Operative Hand Surgery (第7版)で新たに採用された用語、削除された用語

のピックアップ作業です。現在、対象となる用語の抽出がほぼ完了した段階で作業はいったん中断しております。これについては日整会用語集との整合性に関する作業が終わり次第取りかかり、今後は抽出された用語の採否について委員会で検討していく予定です。

以上のようにまだまだ行うべき作業が残っており、現在の全ての課題を終了するまでには今後も引き続き何年も検討を続ける必要があるように思います。しっかりとした日手会用語集の完成を目指して努力致しますので、皆様のご理解とご協力のほど、宜しくお願い致します。

定款等検討委員会

担当理事 柿木良介

定款等検討委員会は、現在担当理事、委員長を柿木良介が、委員として、亀井譲先生、的場浩介先生、麻田義之先生、楠原廣久先生の5名で活動しています。

2018年度には、日本手外科学会専門医は、全員国際手外科連合日本支部、アジア太平洋手外科連合日本支部会員になっていただくよう細則の変更をいたしました。グローバル化の進む中で、日本手外科学会専門医の先生方には、日本の手外科に貢献していただくのみならず、国際的視野を持って国際的な手外科の発展にも貢献していただくことを義務化させて頂きました。一般社団法人日本手外科学会定款施行細則第6号専門医制度細則第8条に「専門医資格決定を受けた者で登録料20,000円と国際手外科学会連合日本支部及びアジア太平洋手外科学会連合日本支部会費を納付した者に対して、本学会の専門医として登録し専門医認定証を交付する。」となっております。また専門医取得後5年ごとに行われる資格更新に関してですが、専門医制度細則第10条に専門医資格また専門医更新の条件として、資格更新申請時において「5年間引き続いて本学会と国際手外科学会連合日本支部及びアジア太平洋手外科学会連合日本支部の会員であること。」となっておりますので、ご周知のほどお願い申し上げます。

2019年度の活動計画といたしまして、日本手外科学会専門医の国際手外科連合日本支部、アジア太平洋手外科連合日本支部への加入の義務化に伴い、国際手外科連合日本支部及びアジア太平洋手外科連合日本支部の会計を日本手外科学会会計に組み入れて、会計の一元化を計画しております。これに関しましては、昨年末、加藤理事長と顧問弁護士と接見を行い、細則変更を検討いたしております。

定款等検討委員会は、日本手外科学会をよりよくするため活動いたしております。皆様の忌憚なきご意見をお待ち申し上げます。

オンラインジャーナル別冊運用委員会

委員長 平田 仁

オンラインジャーナル別冊運用委員会は「日手会会員に対するインターネットを活用する学術情報の提供」を目的に設立された委員会であり、日本手外科学会の中では最も歴史の浅い委員会である。

設立の経緯も踏まえて、現在は私が担当理事と委員長を兼務し、坪川直人先生、柿渕正男先生、岩崎倫政先生、中島祐子先生、牧裕先生の5名の委員に加えて、酒井昭典先生にもアドバイザーとして参加していただき、オンラインジャーナルHandNowの企画・編集・発信を行なっている。類似のものとしては米国手外科学会(American

Society for Surgery of the Hand: ASSH)が主にresident教育用ツールとして運用するHand-eがあり、ASSHのinternational memberとなっている方の中には閲覧されている方も少なくないと思う。いずれも、インターネットを利用してコンピュータだけではなく、スマートフォンやスマートスピーカーなど多様なデバイスに対応させてアプリケーション、文書・画像情報、ビデオコンテンツ、音声などを組み合わせた情報発信を行うもので、Information and Communication Technology: ICT医療教育ツールと分類できるものである。

HandNowは第58回学術集会の際に試験運用を行なった後にアプリケーションの開発や、ICT基盤の整備を行い、第61回学術集会から本格運用に入った。HandNowは学会ホームページの会員専用サイトで閲覧できるだけでなく、大正製薬の支援で運用されているオンラインアプリeJournalをダウンロードしていただければスマートフォンやタブレット型コンピュータを用いて通勤途中の電車の中でも閲覧できる。実際のコンテンツ作成は別冊運用委員会が任命する5名のeditorial writerと18名のjunior editorにより九州・沖縄・中四国地区、関西・中部地区、北信越・西東北地区、関東地区、東東北・北海道地区の5つのチームが編成されており、各地区ごとに担当して企画・編集がなされ、委員会メンバーはその支援に徹している。現在は酒井アドバイザーと中島委員の元に九州・沖縄・中四国地区メンバーによるHandNow2号の編集作業と、牧委員の元に関東地区メンバーによるHandNow3号の企画作業が並行して行われており、2号は第62回学術集会会期中から配信を開始する予定である。そこで、此处では発刊準備の最終段階にあるHandNow2号のコンテンツを紹介する。

HandNow2号の作成は昨年秋から普天間朝上先生がeditorial writerとなり全体の運用をマネジメントし、高木誠司先生、西田圭一郎先生、園畑素樹先生がjunior editorとなって進めてきた。全体は試験運用版とHandNow1号にならい4種類のコンテンツにより構成されている。最初のコーナーは各分野の第一人者に作成をお願いする推奨論文&トピックスである。今回は副島修先生による「進行期母指CM関節症の手術治療: Ligament Reconstruction Suspension Arthroplasty (LRSA法)」と奥津一郎先生による「手根管症候群の診断と治療-From the past to the future」の2編がアップロードされる。第2コーナーはホットな話題を集めてクイズ形式で最新情報を提供するQ & Aコーナーであり、絞扼性神経障害を対象として、正中神経障害を安部幸雄先生が、尺骨神経障害を今谷潤也先生が、そして橈骨神経障害を橋詰博行先生が解説した。オンラインレクチャーは編集担当者が作成する習わしであり、今回も高木誠司先生が「手の麻酔・ブロック」を、西田圭一郎先生が「リウマチ手の治療方針」を、園畑素樹先生が「上腕骨外上顆炎の治療指針」を、普天間朝上先生が「DRUJ障害」をそれぞれ作成した。4つ目のコーナーは第61回学術集会から編集委員会が選出した秀逸演題を、演者に研究の背景も含めてより詳細にビデオ発表してもらうBack Storiesである。今回は弓削英彦先生、安部幸雄先生、大塚純子先生、阿部圭宏先生、小田良先生が選ばれ、編集委員がインタビュー形式で研究の背景や、発表までの苦労話などを伺った上でビデオ発表を行っていただいた。HandNow2号はすでにほ

ぼ完成し、現在最終校正作業が進められている最中であり、会員の皆様にはほぼ間違いなく62会学術集会の会期中にお届けできる状況にある。いずれのコンテンツも大変素晴らしい出来栄となっているので楽しみにお待ちしております。

医療機器開発・管理運用委員会

委員長 池上博泰

前身の人工手関節運用委員会では新規人工手関節(DARTS人工手関節)実施に関するガイドライン(以下に記載)の策定と運用を行ってきた。これらの経験と実績を生かし、今後、手外科領域全般の医療機器開発と運用管理を行う目的で名称が医療機器開発・管理運用委員会に変更された。担当理事は大江隆史先生、アドバイザーは岩崎倫政先生、委員長は池上、委員は稲垣克記先生、岩本卓士先生、酒井昭典先生、森谷浩治先生の計7名で構成されている。

2017年6月からのDARTS人工手関節使用開始後、販売後成績調査のための実施症例の登録管理、実施者基準のひとつである講習会の主催および受講証の交付を行ってきた。この原稿執筆時点で(2019年2月現在)、すでに35例の関節リウマチ患者にDARTS人工手関節全置換術が行われて、登録されている。

今後はDARTS人工手関節に関する本年度と同様の活動を行いながら、これらに加えて、上述したように他の医療機器の開発およびその管理運用に対するサポートも積極的に実施していく予定である。

実施ガイドライン

1. 適応基準

- ①原則として保存的治療に抵抗する関節リウマチまたはその類縁疾患手関節
- ②原則として50歳以上
- ③Larsen分類grade IV～Vの患者、Ⅲにおいては人工手関節以外の手術で著しい可動域の低下や不安定性の出現等が予想される患者

2. 除外基準

- ①基礎疾患に対するコントロールが著しく不良な患者
- ②人工手関節再置換の患者
- ③神経病性関節症の診断を受けた患者
- ④手関節内部または周囲に感染症がある、若しくは潜在的感染の疑いがある患者
- ⑤精神・神経疾患を有し、医師の指導を守れないと考えられる患者
- ⑥医師の指導による後療法が実施できないと考えられる患者
- ⑦骨量が極めて少なく強固な固定が見込めない患者や、筋肉、腱の再建が困難で機能の回復が見込めない患者
- ⑧骨セメントの使用に伴う血圧低下、ショック、肺塞栓等の重篤な副作用の既往のある患者

⑨活動性の高い症例、重労働に従事している患者

⑩歩行時等に手術側で杖などを使用し手関節に過度のストレスがかかる患者

3. 実施者および施設基準

①手外科学会専門医

②RA手関節を含む手関節疾患に対する標準的な手術経験がある

③後に定める手術手技講習会もしくはe-learningを受講したもの

④人工関節登録制度の施設IDを取得している施設

JSSH-ASSH Traveling fellow報告記

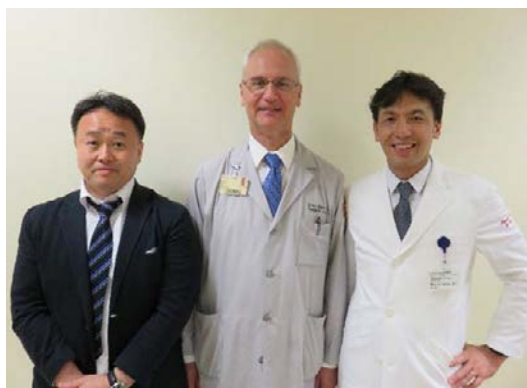
田 鹿 毅

群馬大学医学部整形外科学

2018年度のJSSH-ASSH Traveling Fellowとして9月3日より9月21まで、済生会横浜市東部病院整形外科の山部英行先生、オランダの形成外科医であるKolodzynski先生とともに、米国の4施設を訪問させていただき、またThe 73rd Annual Meeting of ASSHに参加させていただきました。長くもあり、短くもあった夢のような3週間の研修体験を報告させていただきます。

● Loyola University (Chicago): 9/3-4

Dr. Bednarの外来診察、手術を見学させていただきました。患者に対する確に病態を説明し、信頼関係を構築するコミュニケーションの方法は非常に勉強になりました。手術は尺骨短縮術、鏡視下TFCC縫合術、脊損患者に対する手関節伸展再建等を、効率よく行っておりました。二日目の夜はDr. Light邸にてHand Journal Club (抄読会) が開かれました。母指CM関節症、テニス肘の手術法について意見交換を行うことができました。



左より筆者、Dr. Bednar、山部先生。(外来廊下にて)



左より筆者、Dr. Light、山部先生。(シカゴダウンタウンの高層ビル群をバックに)

● Chicago University (Chicago): 9/5-6

Dr. Conti Micaの外来診察、Dr. Massの手術を見学をさせていただきました。レジデントDrが上級Drの外来補助を行う運営方法は、とても効率よいシステムと思われました。手術は関節形成術(母指CM関節症)、指節骨偽関節手術、手根骨部分固定術(変形性手関節症)、関節鏡視下縫合術(腱板断裂)等を行っておりました。Dr. Massは上肢全般を御専門にしており、Dr. Twu (Handフェロー)と、レジデントDrが執刀する手術を、的確に補助し時には自らメスを握り精力的に指導しておりました。



写真3：手前左からDr. Conti Mica、Dr. Angeles、Dr. Wolf、筆者
奥左からDr. Mass、山部先生、Dr. Kolodzynski、Dr. Aultman



左から Dr. Twu、筆者、Dr. Mass、レジデントDr (手術室にて)
(筆者が目を閉じているのが残念！)

● ASSH (Boston): 9/12-15

PrecourseであるResident and Fellow Review Course in Hand Surgery、36th Adrian E. Flatt residents & Fellows Conferenceに出席しました。英語のhearing能力低い自分でも大変勉強になりました。Internatinal Travelling Fellow & Bunnell Fellowの顔合わせ会がありました。日本からは

我々の他に第1回Kleinert Traveling Fellowshipに選出されました河村健二先生も出席されておりました。ヨーロッパ、南米、アジアの 同世代のFellowと意見交換を行うことができ、有意義な経験となりました。



ASSH 2018受付にて



学会のInternational reception：ボストンレッドソックスVSトロントブルージェイズの試合観覧。（Fenway Parkにて）

● Philadelphia Hand to Shoulder center (Philadelphia): 9/17-18

Dr. Osterman、Dr. Dr. Rekanの外来、手術見学をさせていただきました。Dr. Ostermanから診察、手術の合間に、いろいろな質問を受けたため、とても緊張感のあった見学でした。Scratch Collapse Testは大変興味深く、また腱鞘内注射前の注射部への冷却スプレー噴射は衝撃でした。Dr. Osterman執刀の手術は9件/日と驚くべき件数をこなしておりましたが、丁寧かつ迅速な手術手技はとても勉強になりました。



左より筆者、Dr. Rekan、山部先生、Dr. Kolodzynski。（Philadelphia Hand to Shoulder Center at Cherry Hillクリニックにて）



左から山部先生、筆者、Dr. Strohl、Dr. Kearns、Dr. Tosti、Dr. Kolodzynski（若手医師による歓迎会）



Philadelphia Hand to Shoulder centerの先生方と（後方中央；Dr. Osterman）

● University of Michigan (Ann Arbor): 9/20-21

Dr. Kevin Chi Chungの手術見学をさせていただきました。手関節部不全断裂術後の母指対立再建(尺側手根伸筋腱を短母指が移転筋腱へ)はとてもimpressiveな手術でした。円刃による丁寧かつ的確な鋭的な軟部組織の剥離は勉強になりました。我々フェローの研究発表会がありました。発表後Dr. Kevin Chi Chungより熱い総評をいただきました。今後の論文作成の糧にしたいと思います。



研究報告会の後；左から自分、Dr. Kevin Chi Chung、山部先生、Dr. Kolodzynski



全行程は終了後、ミシガン大学近くのビアバーで、地ビールで乾杯!!。みなさん、本当にありがとうございました。

最後に、このような、かけがえのない、素晴らしい機会を与えて下さいました日本手外科学会理事長矢島弘嗣先生、国際委員会担当理事柿木良介先生、同委員長和田卓郎先生、同委員会の諸先生方、訪問先で歓迎していただきました米国手外科学会の諸先生方、自分を推薦していただきました筑田博隆教授、済生会前橋病院の後藤渉先生、また留守中、自分の仕事のフォローをしていただきました教室の先生方、今回のフェロー応募のきっかけを作っていただき、応援していただきました高岸憲二名誉教授にこの場を借りて深謝いたします。誠にありがとうございました。また私の不慣れな米国滞在を大変親切にサポートしていただきました山部英行先生に心より感謝申し上げます。

JSSH-ASSH Traveling fellow報告記

山 部 英 行

済生会横浜市東部病院 整形外科

2018年9月4日から9月23日までの約3週間、群馬大学の田鹿毅先生とともにJSSH-ASSH Traveling Fellowに参加して参りました。主な内容は、ASSHより指定された4施設 (Loyola University, University of Chicago, Philadelphia Hand to Shoulder Center, University of Michigan) の訪問とASSH annual meetingへの参加です。われわれのほか、オランダからのフェロー (Dr. Kolodzynski) も含め3名で楽しく有意義な経験をする事ができました。簡単ではございますが、そこで得られた貴重な体験を報告させていただきます。

● Loyola University (Chicago, IL) 9月4日～9月5日

Dr. Lightがスケジュールをアレンジしてくださり、外来診療の見学後、Madelung変形に対する尺骨短縮手術、A/S下でのTFCC縫合術、脊損後の麻痺手の再建手術などを見学いたしました。早く終わった初日はDr. Lightのコンバーチブル車でシカゴ市内を案内していただき、夜はご自宅で主催のjournal clubにも招いていただきました。



Dr. Lightとシカゴの街並みをバックに記念撮影。

● **University of Chicago (Chicago, IL) 9月6日～9月7日**

続いて、同じくシカゴ市内にあるUniversity of Chicagoを訪問いたしました。主にDr. Wolfの指導のもと、ばね指の腱鞘切開、イヌ咬傷のデブリードマン、母指CM関節症に対する関節形成術の手術を見学しました。翌日はDr. AngelesやDr. Reaveyの外来も見学させていただき、外来患者の治療方針に関してdiscussionいたしました。



Dr. Wolf と手術室にて。



Dr. Reaveyにはアメリカの外来診療の流れを教えてくださいました。

● **ASSH Annual Meeting (Boston, MA) 9月11日～9月15日**

学会初日のBunell luncheonで初めて各国からのfellow (20名程度) と一同に会しました。例年であればここで一人3分程度のpresentation の場が与えられるとのことで準備はしていたのですが、なぜかわれわれに発表の機会はなく、全体でも7-8人しかpresentationの時間がありませんでした。積極性が足りなかったかもしれないと反省すべき点であり、来年度以降参加される先生は積極的に発表したいとアピールすべきであると思いました。



Bunnel luncheonでの各国からのfellowとの集合写真

● Philadelphia Hand to Shoulder Center (Philadelphia, PA) 9月17日～9月18日

非常に忙しい病院で、Dr. Ostermanの指導のもと多くの手術見学を行いました。2つの手術室を使用し、1日に8件の手術を効率よくこなされていました。手術の終わりが見えてきたら閉創はレジデントに任せ、隣の部屋に移動すると次の患者の麻酔がすでにかかっているという具合です。CM関節症の関節形成術がやたら多く、全身麻酔の手術でも全て日帰り手術というのがアメリカらしく印象的でした。スタッフ全員がフレンドリーでナイトライフも楽しく、個人的には一番充実した施設見学でした。

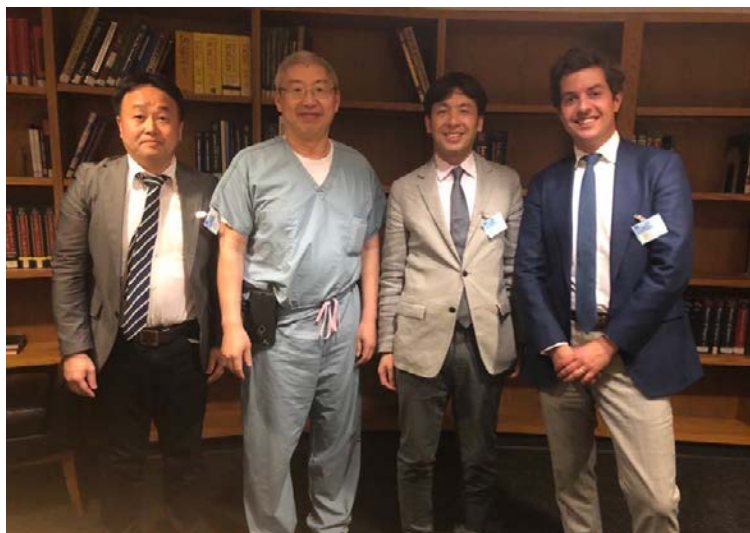


フィラデルフィアではスタッフ全員がフレンドリーにもてなしてくれました。

● University of Michigan University (Ann Arbor, MI) 9月20日～9月21日

最後に日本人fellowはmandatoryと言われている？ University of Michigan、Dr. Chungを訪問いたしました。手術見学では腱移行術の術式に関して有用なdiscussionができました。夕方のカンファレンスではプレゼンテーションの機会が与えられましたが、発表内容に対して鋭いご意見をいただ

き大変勉強になりました。Dr. Chungが指導する学生のプレゼンテーションも拝見いたしましたが、学生とは思えぬほどの洗練されたスライドとプレゼンテーション能力に圧倒され、日本の医学教育の遅れを肌で実感いたしました。これから自分が指導者として後進の医師と接するにあたり参考になる貴重な体験でした。



カンファレンス終了後にDr. Chungを囲んで。左から田鹿先生、Dr. Chung、著者、Dr. Kolodzynski。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えてくださいました日本手外科学会矢島弘嗣理事長、柿木良介担当理事、和田卓郎委員長をはじめとする国際委員会の皆様、推薦して下さった東邦大学池上博泰教授、慶應義塾大学松本守雄教授、留守中に病院業務をフォローして下さった済生会横浜市東部病院整形外科の皆様、そして3週間心の友として支えてくれた田鹿毅先生、Dr. Kolodzynskyに心より感謝申し上げます。



traveling fellow終了後の打ち上げ。左から著者、Dr. Kolodzynski、田鹿先生。

日本手外科学会関連のお知らせ

◆第62回日本手外科学会学術集会◆

会 期：2019年4月18日(木)～19日(金)
会 場：札幌コンベンションセンター
会 長：岩崎 倫政(北海道大学大学院 医学研究科 整形外科学分野)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/jssh2019/index.html>

.....

◆第25回春期教育研修会◆

会 期：2019年4月20日(土)
会 場：札幌コンベンションセンター1階特別会議室
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse.html>

.....

◆第4回日本手外科学会カダバワークショップ◆

会 期：2019年8月29日(木)～8月30日(金)
会 場：札幌医科大学医学部
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会

.....

◆第25回秋期教育研修会◆

会 期：2019年8月31日(土)～9月1日(日)
会 場：北海道立道民活動センター [かでの 2.7]
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会

関連学会・研究会のお知らせ

◆第31回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会 期：2019年4月19日(金)～20日(土)
会 場：札幌コンベンションセンター
会 長：越後 歩(札幌徳洲会病院 整形外科外傷センター)
詳 細：<http://meeting31.jhts-web.org/index.html>

.....

◆第30回日本医学会総会2019 中部◆

会 期：2019年4月27日(土)～4月29日(月・祝)
会 場：名古屋国際会議場、名古屋学院大学白鳥学舎、ウインクあいち
会 頭：齋藤 英彦(名古屋大学名誉教授)
詳 細：<http://isoukai2019.jp/index.html>

.....

◆第92回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：2019年5月9日(木)～5月12日(日)
会 場：パシフィコ横浜
会 長：山下 敏彦(札幌医科大学医学部 整形外科学講座)
詳 細：<http://www.joa2019.jp/>

.....

◆第62回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：2019年5月15日(水)～5月17日(金)
会 場：京王プラザホテル札幌 ロイトン札幌
会 長：山本 有平(北海道大学形成外科)
詳 細：<http://jsprs2019.jp/>

.....

◆第32回日本臨床整形外科学会学術集会◆

会 期：2019年7月14日(日)～15日(月・祝)
会 場：神戸国際会議場、神戸商工会議所
会 長：田中 幸博(田中整形外科)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/32jcoa/>

◆第30回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：2019年8月23日(金)～24日(土)
会 場：金沢市文化ホール
会 長：池田 和夫(金沢医療センター整形外科)
詳 細：<http://www.c-linkage.co.jp/jpns30/>

.....

◆第12回日本手関節外科ワークショップ◆

会 期：2019年9月14日(土)
会 場：奈良春日野フォーラム麓～I・RA・KA～
会 長：村田 景一(市立奈良病院 四肢外傷センター)
詳 細：<https://12jsw.eventworks.jp>

.....

◆第34回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：2019年10月11日(木)～12日(金)
会 場：パシフィコ横浜
会 長：紺野 慎一(福島県立医科大学医学部整形外科)
詳 細：<https://convention.jtbcom.co.jp/joakiso2019/>

.....

◆第28回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：2019年11月14日(木)～15日(金)
会 場：仙台国際センター
会 長：館 正弘(東北大学大学院医学系研究科 外科病態学講座形成外科)
詳 細：<http://jsprs28.umin.jp/>

.....

◆第30回日本小児整形外科学会◆

会 期：2019年11月21日(木)～23日(土)
会 場：大阪市中央公会堂
会 長：川端 秀彦(南大阪小児リハビリテーション病院)
詳 細：<http://jpoa2019.umin.jp/>

.....

◆第46回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：2019年11月28日(木)～29日(金)
会 場：ハイアットリージェンシー東京
会 長：櫻井 裕之(東京女子医科大学 形成外科学教室)
詳 細：<http://jsrm46.umin.jp>

編集後記

今年度から広報渉外委員会のメンバーになった大江隆史です。2019年の最初の委員会は肘関節学会に合わせて、2月8日厳寒の北海道小樽で開催されました。観測史上最大の寒波が来るとニュースできいていたものの、少し厚手のコートを足せばよいだろうと高をくくって出かけました。結果は、北海道を完全に甘く見ていた事になりました。小樽の運河沿いでも日中の最高気温が氷点下11度は半端ではありません。外を歩くのがつらくなり、すべての食事をホテルで済ませたくになります。小樽の帰りに札幌の雪まつりに寄りましたが、歩いているだけで悲しくなります。4月にはその札幌で手外科学会です。早春の北海道に期待しています。北の大地から野心的にイノベーションを起こせる力をもらえることでしょう。

(文責：NTT東日本関東病院 大江 隆史)

広報渉外委員会

(担当理事：平瀬雄一，委員長：白井久也)

委員：大江隆史，岡崎真人，岸 陽子，佐竹寛史，辻 英樹)